

高知民研夏季合宿2010～高知市・桂浜～

藤田 毅（高知民研事務局）

高知民研夏季合宿研究会が8月28日（土）・29日（日）に高知市桂浜で14名の参加で行われました。以下、報告と議論の概要を紹介します。

「貧困と学力」

初日はまず、森尚水さん（朝倉ゼミナール）より、朝倉ゼミに通う児童養護施設の中学生が置かれている学習の厳しい現状や、そうした中学生が高校に落ちたら行き場がなくなってしまうという現在の高校入試制度の深刻な状況、朝倉ゼミで30年近く「オール1」の子どもと関わってきた経験から、高校入試に合格すること1本に絞った数学の本（「かけ算・わり算がわからなくてもできる 中学生の数学（代数）」）を出版することになった経緯が報告されました。森さんは、はじめて臨時教員をした時、定期テストで学級の小学5年生が自分の答案に「0点」と書いてきたことにショックを受け、その対策に小学1年の計算を特訓させていたところ、保護者から抗議が来たこと、朝倉ゼミで3×8がわからない中学3年生に「どうしてそんながわからんが」と聞いたところ、その生徒から「しーっ」と言われたことから、子どものプライドを大切にすることを学んだといいます。そして浦戸小学校で11－3が分からない小学生に出会った時、それらの失敗を思い出し、思い切ってその子に3－11という中学校の数学をすることで、その子が学級のみならず一緒に勉強できるようになり自信を取り戻していった例が報告されました。最後に、数学を学ぶ際に重要なこととして、問題文をゆっくり読むこと、丁寧に写文すること、順序を丁寧に追うこと、数学を分数でできるようにしていくこと、等を提起されました。

議論では、今教育現場で教師が子どもを信頼しているのか、教師の側に子どもが正答に向けて苦役することをよしとする教育観があるのではないか、高校受験がある以上きれいごとではすまず、何としても入試で点数を取らなければならない現状があること、一方で高校に行けない生徒が必然的に生まれる現在の入試制度を抜本的に改革する必要性、さらに、森さんの学校外での実践をどう学校システムを変えていく上で生かしていくか、等の意見が出されました。

「潮江中学校での3年間を振り返って」

次に、加藤優子さん（青柳中学校）より、潮江中学校における教育実践について、校区の状況や授業妨害、暴力、暴言、いじめ、不登校、授業エスケープ等様々の困難な状況のなかで、教師が生徒とのかかわりを大切にしながら教育実践を行ってきたことを、個々のケースをもとに具体的に報告されました。そして、取り組みの過程でたくさんのドラマを経て本番を迎えた行事の取り組みと、その3年間の行事を収録した「卒業DVD」を参加者で視聴しました。最後に、たくましく成長した卒業生に出会い、教師をしてよかったと思う瞬間が中学校教師である自分を支えていること、中学校で何をなすべきかという問いに対して、それは教師が真剣に向き合うことではないか、そして中学校における進路保障の重要性と課題を再確認して報告を終えました。

議論では、学校づくりにおける管理職の役割、高知市内の一部の中学校で行われている

よさこいの取り組み、生徒の学習を支援する際に、生徒の実態を丁寧に分析することの重要性、私学優位と経済的困難な状況にある潮江地区の現状、教育活動における日常と非日常の双方の重要性、中学生や中学校教員にとって、高校入試がきわめて重圧になっている現状、等の意見が出されました。

「太平洋学園高等学校における共同研究」

まず、加藤誠之さん（高知大学）より、昨年度より進めている私立太平洋学園高校との共同研究に関して、中学新卒者数に対する求人が大幅に減少していること、また、青砥恭さんの議論をもとに、高校中退が貧困の再生産の中心的メカニズムとなっていることを踏まえた上で、社会として最低でも高校卒業までの学力を保障しなくてはならないことが、議論の前提として提起されました。次に、競争・選抜で傷ついた子どもたちがどうやって学習への意欲を取り戻すのか、という課題に対し、習熟度別学級編成や競争の教育のあり方を批判した上で、学ぶということは、文化的共同体への参加であること、そして正統的周辺参加論をもとに、太平洋学園の高校生たちが、最も根源的な意味での学習を求めていることが指摘されました。

続いて、藤田毅（太平洋学園高等学校）が、太平洋学園の生徒支援体制と生徒の学習状況について、学力回復・学力向上に向けた試行錯誤を含む取り組みと、共同研究において大学生が授業に参加し、生徒の学びをどのように支援しているかについて報告しました（詳しくは藤田毅『「生徒支援」の視点に立った学校づくり』教育科学研究会編『教育』2010年5月号、国土社、参照）。

議論では、生徒にとってナナメの関係性になれる大学生の存在の大きさ、大学生との対話を通して生徒が丸ごと認めてもらえる経験の意味、高卒後の就職ルートを開拓することの必要性、生徒支援体制のもとでの教員の専門性とは何かという問い直し、学習が困難ななかでも教員が一定の手だてを取り、子どもに丁寧に向き合っ子どももそれに向き合えることを保障するような教育条件整備の必要性、等が出されました。

「学校は残していいんだ、つくっていいんだ」

2日目は、まず濱田郁夫さん（奈半利中学校）より、県内の学校統廃合問題の近況について2つの事例の報告がありました。1つ目は、県東部のある市の状況を例に産業別人口・農業生産額・漁業水揚額の推移データを紹介した上で、統廃合対象校が漁業の中心地となっていること、学校が統廃合されることで漁業が急速に衰退する可能性があることが指摘されました。2つ目は、四万十市西土佐地域の小学校統廃合計画について、西土佐地域の産業別人口のデータや、地域で小学校を残したいという保護者からの相談をもとに開催した学習会のことが報告されました。

議論では、第1次産業と学校教育との距離感、地元の小学校を守ることが中村高校西土佐分校を守ることにつながるということ、教職員の地元意識の欠如、学校の教育活動が地域に見え活発となることで、地域から学校を残せという運動が起こってくるということ、学校統廃合議論に関して「切磋琢磨」論を打破していくこと、小中一貫教育の動向などが出されました。

「高校再編の動向と課題」

最後に吉岡太史さん（高知高教組）より、高知県における高校再編計画と高校入試改革について報告がありました。前者については、この10年間の高校再編・統廃合のすさまじい実態をふり返った上で、それが子どもたちにより良い教育環境を提供することにつながったのか、後者については、この間の入試改変による受検機会の複数化、選抜制度の多様化が子どもの学習意欲の向上と学力の向上につながったのか、問題提起されました。さらに、これからの高校教育の課題として、子どもの権利委員会の勧告の意義、学力の「量から質への転換」の具体的な意味、子ども・若者の学校から社会への移行の困難と高校教育、高校入試における適格者主義、貧困と格差の問題の5つの視点から考えていくことが提起されました。

議論では、教育政策の真のねらいとは何なのか、再編計画策定段階での情報公開の不足、総合学科に対する評価、高校入試がめまぐるしく変わることの中学生への悪影響、高校無償化と高校教育のあり方、高知市で授業改革が始まりかけた時に全国学テが入りドリル中心授業になってしまったこと、教員研修における心理学中心主義の問題、等について意見が出されました。

2日間で学び交流したことを生かし、今後の教育実践・教育研究に生かしていければと思います。